

# 学校図書館における「調べ学習」の有効性を探る

浅野真紀子（中京大学大学院 情報科学研究科）

## 1. 目的

今日、中学校の社会科教科書には、生徒の学力を高め、本や資料に親しむ「調べ学習」をする単元が増加し、そのためインターネットや図書館を利用することがある。しかし、生徒にどのように学習させるかについては学校現場や教科の教師に任されている。「〇〇を調べよう」と教科書にある学習内容において、たとえば生徒が調べる活動は、教科書に答えがあるからそれは時間の浪費であり、学習効率は良くないと考える教育関係者は多いようである。

そこで、学校図書館教育を取り入れた学習方法、つまり、学校図書館の機能（司書教諭による学習支援と学校司書による資料提供支援など）を活用する学習に、人が他の人と一緒に同じ問題を解くなど複数の人が協力し合って行う「協調的認知過程」を加えることで、外化による理解の深化やコミュニケーション能力の育成が見込まれ、このような学習の成果として、生徒や教師の学びの意欲が促進される効果があることを明らかにしたい。

## 2. 方法

中学1年社会（地理）で、対象はB組（中高発展進学コース、25名）である。社会科教師一人と研究者（筆者）が協力して、生徒の学習を指導するという形の Team Teaching による学校図書館での授業を「表1」のように実施した。なお、研究者は司書教諭資格をもった司書として勤務している。調べ学習の時間は、資料の紹介・探し方、パソコンによる情報検索方法の指導や相談を担った。

<表1 学習内容> 授業の1コマ=45分

学習テーマ	授業のコマ数	グループ別 学習内容(1)～(4)
世界の国々	17	(1)5グループで国（オーストラリア・カンボジア・ドイツ・フィンランド・モロッコ）の基本情報を調べる (2)新5グループで各国別に、現状（移民・外国人労働、環境問題、教育と生活、産業・貿易、世界遺産）を調べる
私たちの未来	12.5	(3)新々5グループで問題点（医療、エネルギー資源、食、難民、水）を調べる
さがしもの	0.5	(4)2,3人の自主的なグループで、参考図書探索問題を考える

学習科学の先駆者の一人であるブラウン（Brown, A.L.）の研究で工夫された教え方にジグソー式と相互学習法がある。（三宅・白水、2003）これらを組み合わせた1組5名を基本とする5グループが、最初に事例として学んだフランスと関係ある国を5ヶ国選択し、これらの国の現状を調べて比較し、世界全体が抱える問題から私たちの未来までを考えるとこの協調学習を行った。学習内容(1)では各グループ内で協力して国の情報を調べた。(2)では各国代表が次の学習テーマ（各国の現状）で5つの新しいグループを作り、各国と5つの問題を結んだ。(3)では(2)での課題から気づいた問題点を5つの下位項目に絞り、新たなグループで私たちの未来について考えた。(2)(3)の後には、グループ発表を行った。各発表は生徒自身で評価があった。(4)では、自主的なグループを生徒が作り、与えられた課題に取り組んだ。これは今回の学習の定着をみるために、さらに次年度の学習を考察するために、これまでの学習テーマのまとめとして取り入れた。

教師の授業のねらい（自分で調べる楽しさ、大切さを知り、個人の成長とクラス全体の成長をめざすこと）を具体的に、自分の考えを資料やグループ内での話し合いからまとめ、自ら調べる必要性に気づかせること、世界と自分が繋がっていることを自覚できることを学習目標としていた。(2)(3)の学習テーマ終了時には、生徒にアンケートを実施し、教師にはインタビューとメールによって、その反応や変化を分析した。なお、協調過程導入の効果を見るため、同学年A組を対照クラスとして適宜観察した。

## 3. 結果

収集したデータから、生徒や教師の学習意欲が向上したかどうかを分析した。今回の結果は、概ね「協調学習は、生徒に学習意欲を与え、学習効果を高める」と言ってよい結果が得られたと考える。

アンケート結果によれば、生徒の総合満足度では約70%あった。満足できなかったのは約10%であった。その理由はグループに馴染めなかったからであった。残りの20%は肯定でも否定でもなかった。生徒へのアンケートの内容は、調べ学習を体験したあとの感想を中心としたものである。楽しいか、興味がもてたか、役に立ったかという3つの項目の是非

を各6つ程度の内容から複数選択する形式とした。「表2」は表1の学習内容(2)(3)の調べ学習後のアンケート結果から、各項目の上位の回答を得られたものを、数値の大きい順に並べたものである。

<表2 生徒へのアンケートデータ分析>

表1の学習内容	アンケート項目	意見・感想 (複数選択可)	%
(3)	グループでの学習	知らないことがわかり、発見があった	83
(2)	発表	テーマ別発表は調べた内容が足りなかった(もっと時間がほしかった)	74
(2)	役に立った	世界の国の事情が分かってきた	72
(3)	興味もてた	自分たちで調べるとよく分かる	71
(2)	楽しかった	グループでよかった、まとまっていた	69
(2)	興味もてた	自分たちで調べるとよく分かる	67
(3)	役に立った	自分たちで調べると大事だと思った	65
(3)	楽しかった	図書館を使った	63

そのほか、調べ方、わかったこと、調べ学習の時間配分、発表の評価、次回の調べ学習への要望を自由記述で行った。ここで最も多い意見は「自分たちでグループのメンバーを決めたい」であった。不満をもった生徒の原因とも併せると、人間関係がグループ学習に大きなウェイトを占めていることがわかる。「調べる時間、発表する時間がもっとほしい」「他にももっと調べたい」「問題点を見つけるのではなく、良い所を見つけることをしてみたら」という提案も含まれていた。発表の評価では、人前で話せなかった生徒に対する応援メッセージが多かった。今回の授業の最初は何をしたらいいかかわらないという生徒の疑問から始まったが、協調学習によって、積極的な学習態度が生まれたと考えられる。

教師にとっては、このような協調学習は初めての経験であった。インタビューやメールによれば、「期待以上に満足できた。120%の出来だった」とあり、授業準備の楽しさはこれまでにないものであったと言われた。「協調学習は、教師に授業意欲を与え、授業効果を高める」と言ってよい結果となった。次年度も引き続き実施したいことや他の教師にも広めたいという積極的な意見を受けた。

#### 4. 比較

今回の学習方法の効果を確認するため、今年度4月、B組と、協調活動を導入しなかったA組との両方の生徒に対して「自分にとって何か変化はあった

か」という問いに答えを求め、比較した。アンケートの結果は「表3」のようなものになった。

<表3 調べ学習後の変化> 複数選択可

A組: 17人 積極的な変化: 53%		B組: 25人 積極的な変化: 86%	
1位 47%	特に変化はなかった	1位 56%	テストの点数が上がった: この学習後、社会科実力テストでは、平均点が約14点上がり、A組とほぼ同じ。下位の生徒ほど伸びた。最低点20点上昇。
2位 17.6%	社会科の授業が好きになった	2位 28%	知りたいことが増えた
	学校が楽しい	3位 24%	自分の意見が持てるようになった
	知りたいことが増えた	4位 20%	クラスが楽しい 本を読むようになった

平均点は前回約23点の開きがあった(教師資料より)

現時点では、まだその有効性の証明はできていない。ただし、テストの平均点が上がったのは、B組だけであり、B組の生徒はその原因がB組の調べ学習にあったと考えていることは明らかとなった。また「この教科では考えながら記録用紙を書いているから、頭によく入る」という自由記述がみられた。

#### 5. まとめ

協調学習を用いた図書館での調べ学習には、「表3」のように、実力テストの成績(平均点)の上昇が起きたことから、個人がグループの学習を向上させ、また「表2」のグループ学習を肯定する意見が多いことから、グループが個人を向上させる力が働いたと考えられる。また、生徒と一体感を持って授業に取り組み、自身も教師としての再発見をし、生徒との関係も良好であったと教師が答える今回の授業実践は、生徒・教師の満足度という点では概ね成功した。学習目標に到達できたかどうかは具体的なデータでは認められなかった。しかし、学校図書館における教科教師、司書教諭、学校司書の協働は、「協調的認知過程」を取り入れることで、生徒の学習に効果的に作用する一つの可能性を見出せたと考えられる。今後はさらに継続したデータの蓄積、他の教科における具体的な波及効果の調査分析も必要であり、これによって、「調べ学習」のより効果的な学習のあり方を追求していきたい。

#### 参考文献

三宅なほみ、白水始 『学習科学とテクノロジー』  
日本放送出版協会 2003